



マイワシ（対馬暖流系群）①

マイワシは日本周辺に広く生息し、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

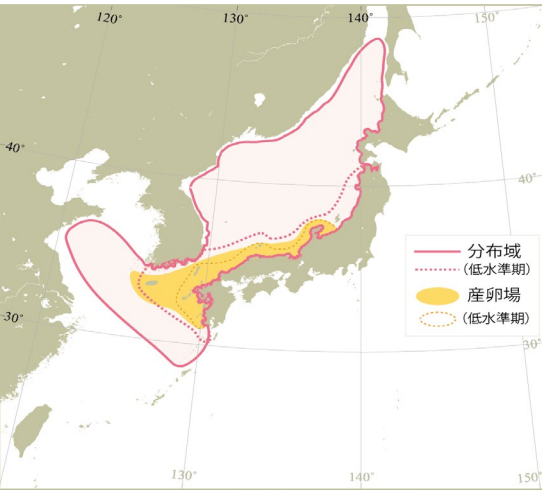


図1 分布域

東シナ海北部から日本海北部に広く分布する。産卵場は日本の沿岸。分布域、産卵場は資源量とともに変化すると考えられている。

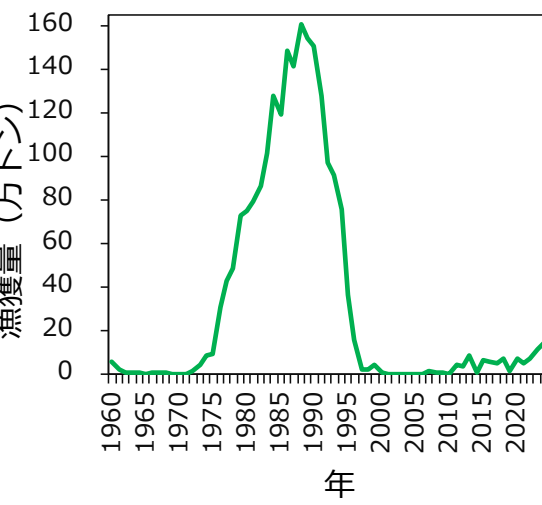


図2 漁獲量の推移

漁獲量は、1970年代から増加し、1983～1991年は100万トンを超えた。その後急速に減少し、2001年には1千トンとなった。2011年以降は増減しながら横ばいで推移し、2023年に10万トンを超え、2024年は14.4万トンであった。

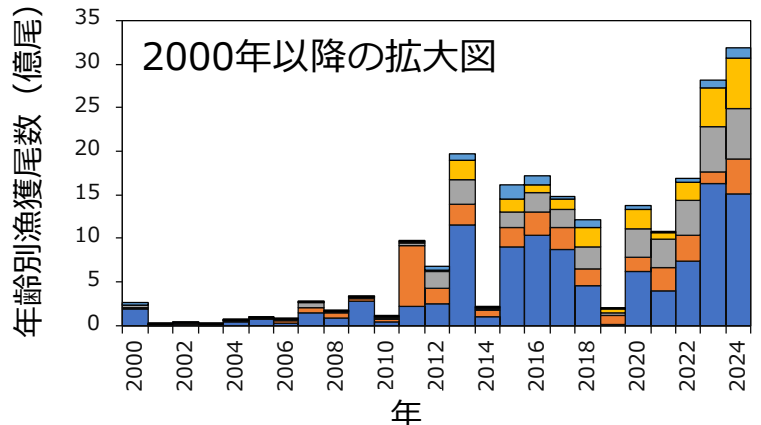
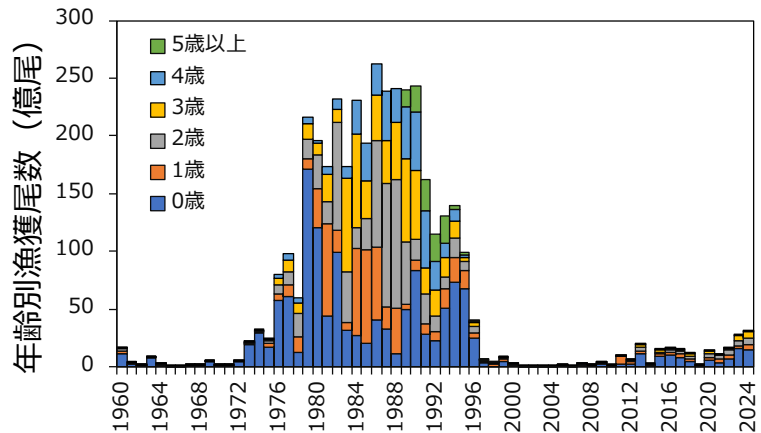


図3 年齢別漁獲尾数

漁獲物の年齢構成を尾数で見ると、0～2歳を中心に構成されている。2024年は1～3歳魚の割合が増加した。

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については、管理基準値等に関する研究機関会議資料において提案された値を暫定的に示した。

マイワシ（対馬暖流系群）②

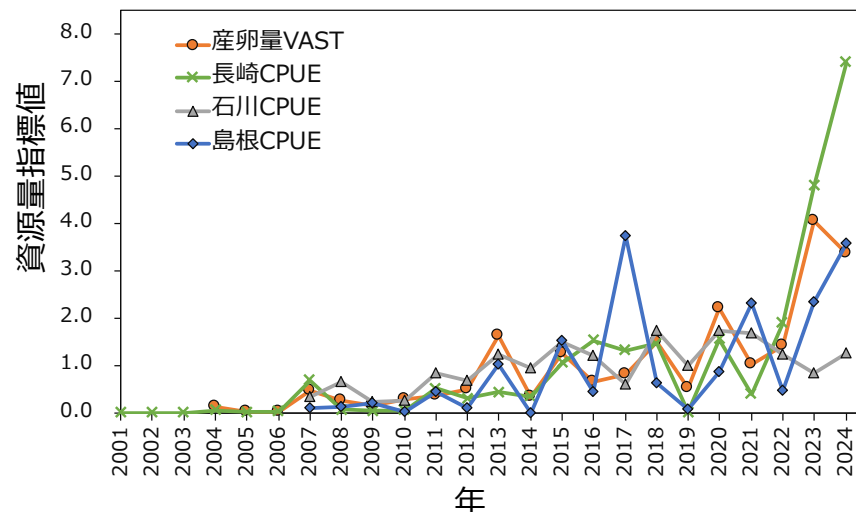


図4 資源量指標値

資源量指標値には、標準化した産卵量、石川県中型まき網CPUE（1日・1隻当たりの漁獲量）、島根県中型まき網CPUE（1網当たりの漁獲量）、長崎県中小型まき網CPUE（1日・1隻当たりの漁獲量）を用いた。すべての指標値は2010年以降、変動しながら増加傾向を示した。各指標値は全期間の平均値が1になるよう規格化している。

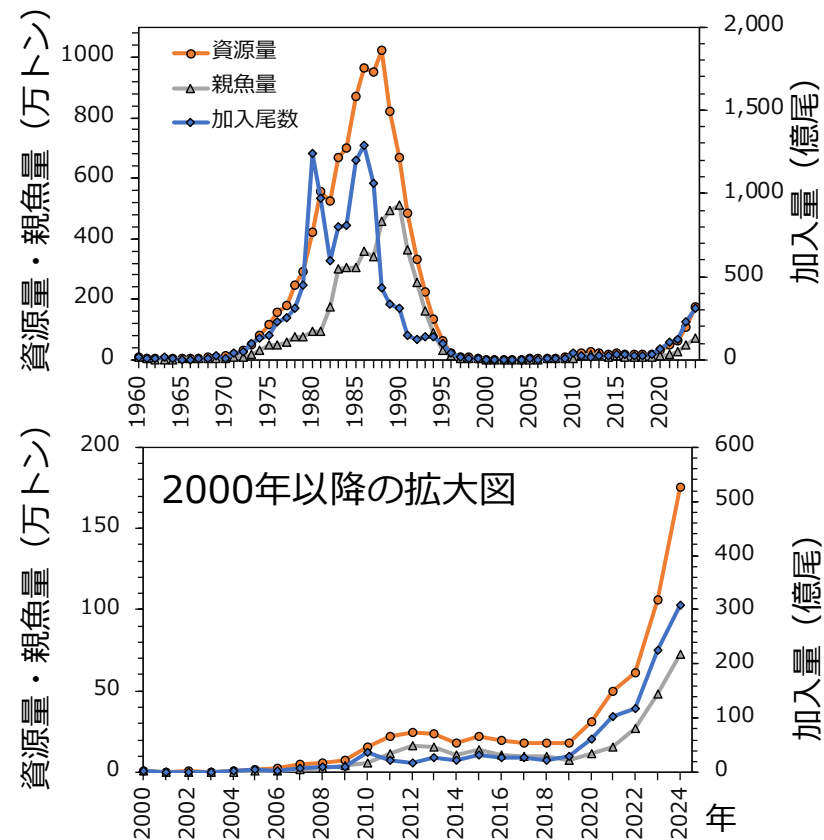


図5 資源量、親魚量と加入量

資源量および加入量（0歳魚の資源尾数）は2020年以降増加傾向にあり、2024年はそれぞれ175.1万トンおよび308億尾であった。親魚量の動向は直近5年間（2020～2024年）でみると増加で、2024年は72.9万トンであった。

マイワシ（対馬暖流系群） ③

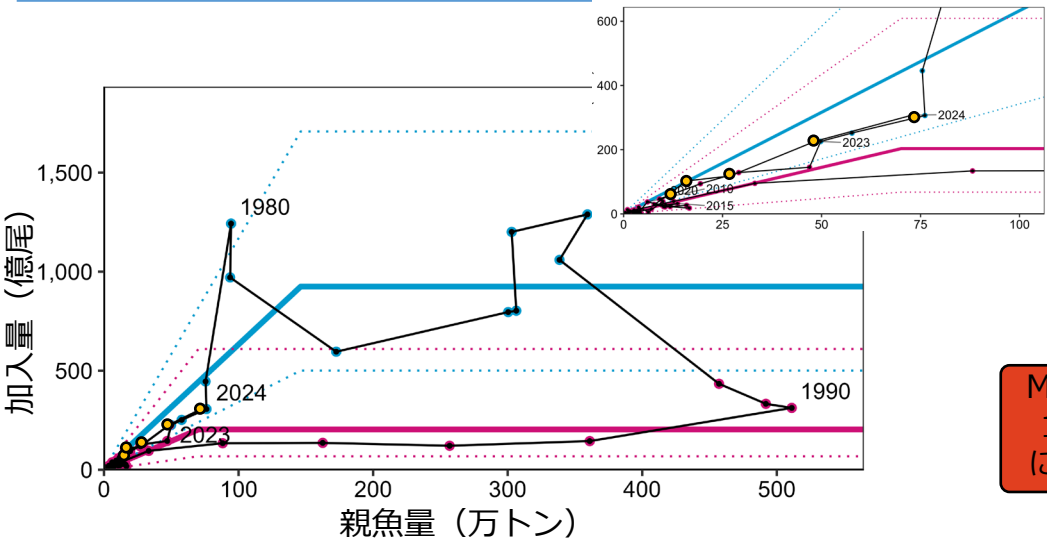


図6 再生産関係（赤線：通常加入期、青線：高加入期）

通常加入期と高加入期で分けたホッケ－・スティック型の再生産関係を適用した。通常加入期（赤太線）は1960～1975年および1988～2023年（赤丸）の、高加入期（青太線）は、1976～1987年（青丸）の親魚量と加入量に基づく。図中の点線は、それぞれの再生産関係の下で、実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

赤丸、青丸は再生産関係を推定した時の観測値、橙色はその内の直近5年の観測値である。

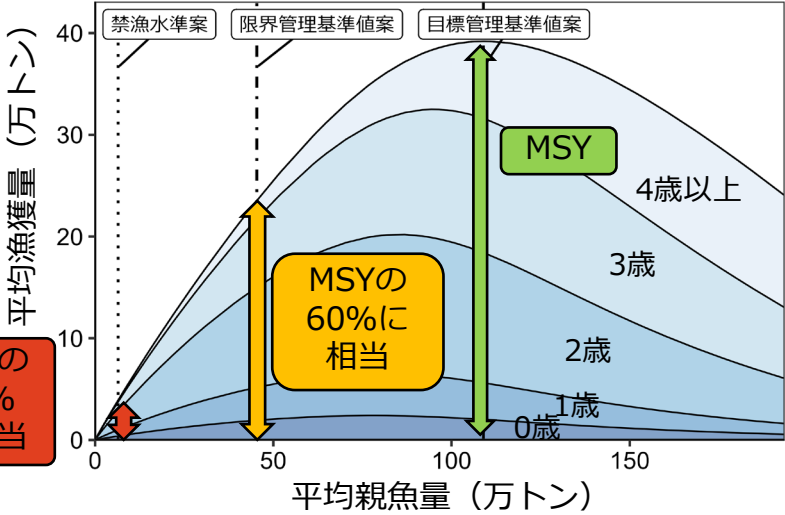


図7 管理基準値案と禁漁水準案

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は108.9万トンと算定される。目標管理基準値としてはSBmsy、限界管理基準値としてはMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準としてはMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量を提案する。

※将来予測は通常加入期の再生産関係に基づく。

目標管理基準値案	限界管理基準値案	禁漁水準案	2024年の親魚量	MSY	2024年の漁獲量
108.9万トン	45.4万トン	6.5万トン	72.9万トン	39.2万トン	14.4万トン

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については、管理基準値等に関する研究機関会議資料において提案された値を暫定的に示した。

マイワシ（対馬暖流系群）④

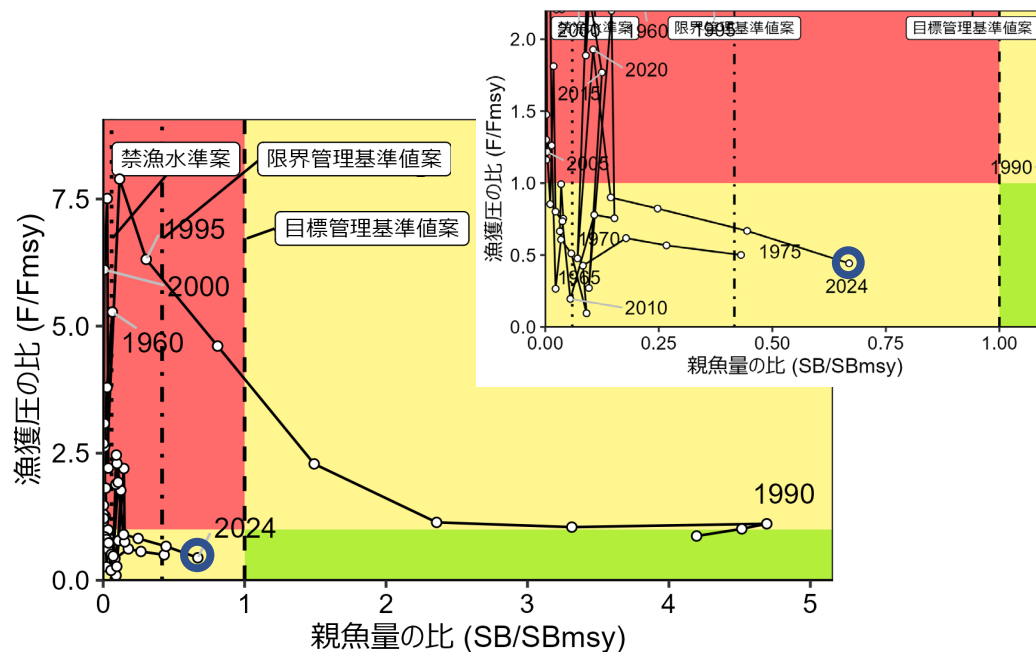


図8 神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、多くの期間で最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を下回っており、2024年もSBmsyを下回った（0.67倍）。漁獲圧（F）は、近年SBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を下回っており、2024年もFmsyを下回った（0.44倍）。

※通常加入期（1960～1975年および1988～2024年）の結果を記載。

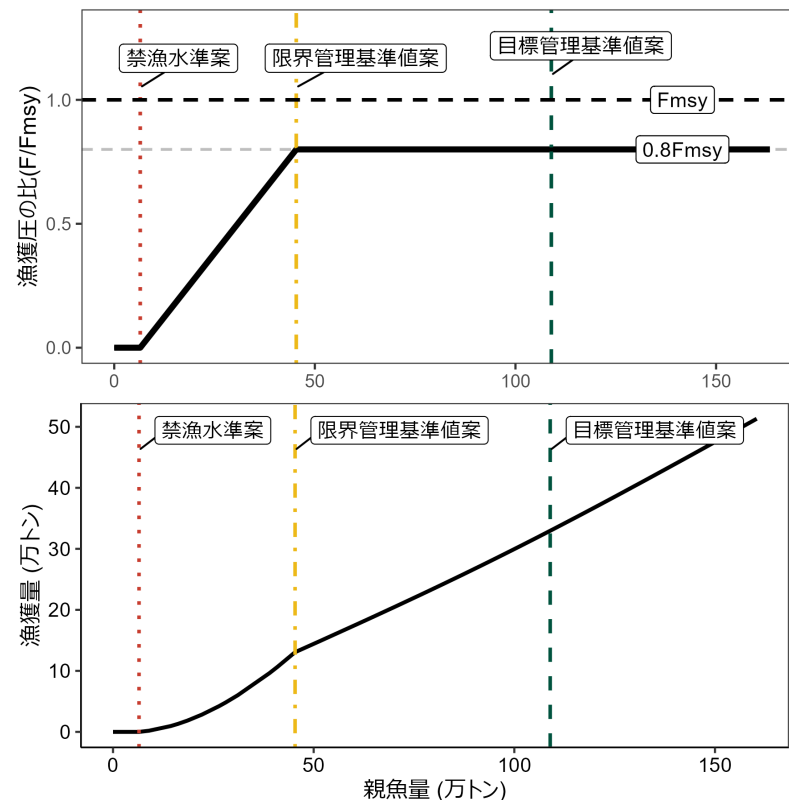


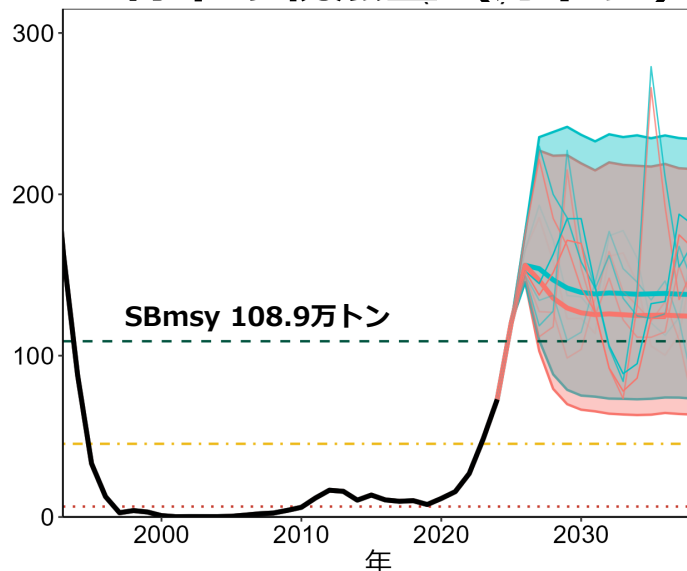
図9 漁獲管理規則案（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

Fmsyに乘じる調整係数である β を0.8とした場合の漁獲管理規則案を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については、管理基準値等に関する研究機関会議資料において提案された値を暫定的に示した。

マイワシ（対馬暖流系群）⑤

将来の親魚量（万トン）



将来の漁獲量（万トン）

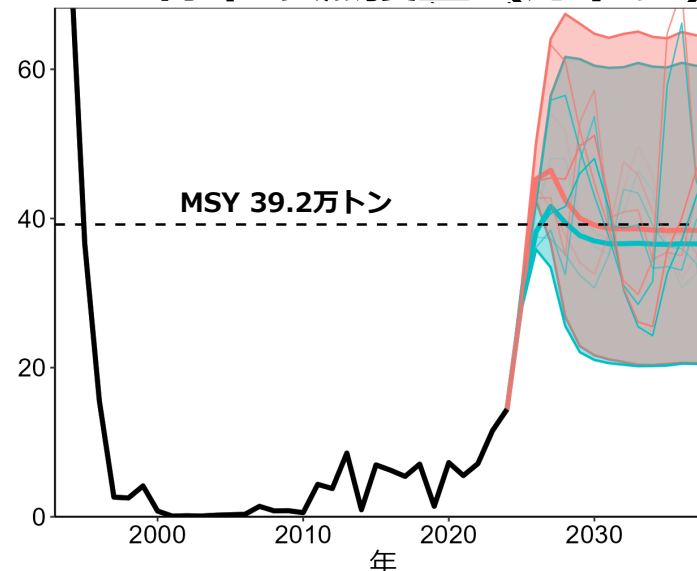


図10 漁獲管理規則案の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

β を0.8とした場合の漁獲管理規則案に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

親魚量の平均値は増加した後、目標管理基準値案以上で推移する。漁獲量の平均値は増加した後、MSY水準付近で推移する。

漁獲管理規則案に基づく将来予測
($\beta = 0.8$ の場合)

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

----- MSY

----- 目標管理基準値案

-. -. 限界管理基準値案

..... 禁漁水準案

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については、管理基準値等に関する研究機関会議資料において提案された値を暫定的に示した。

マイワシ（対馬暖流系群）⑥

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

1. 将来の平均親魚量（万トン）

2036年に親魚量が目標管理基準値案（108.9万トン）を上回る確率

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	
1.0	120.3	156.0	137.8	122.8	116.0	112.9	111.4	111.6	110.9	110.2	110.2	110.2	42%
0.9			142.1	128.9	122.4	119.3	118.1	118.4	117.8	117.1	117.3	117.4	49%
0.8			146.7	135.6	129.5	126.5	125.4	125.9	125.4	124.8	125.0	125.2	56%
0.7			151.4	143.0	137.5	134.7	133.7	134.3	133.9	133.4	133.6	133.9	64%
現状の漁獲圧			153.9	147.0	141.9	139.2	138.2	138.9	138.5	138.1	138.3	138.6	68%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
1.0	28.8	53.9	51.3	44.9	41.9	40.7	40.1	39.9	39.9	39.6	39.5	39.5
0.9		49.7	49.1	43.9	41.1	40.1	39.5	39.4	39.4	39.2	39.1	39.2
0.8		45.3	46.5	42.5	40.0	39.1	38.6	38.6	38.6	38.4	38.4	38.5
0.7		40.7	43.4	40.6	38.6	37.8	37.4	37.4	37.4	37.3	37.3	37.3
現状の漁獲圧		38.2	41.6	39.4	37.7	37.0	36.6	36.6	36.7	36.6	36.5	36.6

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、 β を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2022～2024年の平均： $\beta=0.65$ 相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2025年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2026年から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

$\beta=0.8$ （標準値）とした場合、2026年の平均漁獲量は45.3万トン、2036年に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は56%と予測される。また、 $\beta=0.8$ 以下であれば、2036年に親魚量は目標管理基準値案を50%以上の確率で上回ると予測される。

※表の値は今後の資源評価により更新される。

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については、管理基準値等に関する研究機関会議資料において提案された値を暫定的に示した。